

糟糠の妻

〜詠み歌う喜びを分かち合つて〜

富ヶ丘 佐藤 幸一



たような俳句を作るのかとよく人に問われます。それは、妻が見てくれ、見たものを教えてくれるのです。「花が咲いている」「鳥が飛んでいる」「餃子が右側にある」など。従って、私の俳句の半分は妻が作ったようなものです。

二〇〇八年のはじめに、町公民館活動の講座で小松チヒロ先生のボイストレーニングがあり、妻と参加しました。ここから歌三昧の生活が始まりました。そこで知り合った人から「フォーク列車」を教えてもらい、フォークソングを歌う集まりに出

わが俳句 半分は妻詠みし
わが杖となり眼となりて

私は視覚障害者(全盲)です。緑内障が原因で二十余年前に失明しました。どうやって、見え

いました。

禍福繩をなうが如し

やまびこの特別演奏会を終えた翌週の夜、就寝後一時間、何か具合が悪く目を覚ました。左の手が上がらない、左の足が動かない。すぐに病院へ。脳梗塞でした。二十数日の入院。幸い早期発見で、少しずつ手足は動くようになり、現在は通常の生活ができるようになりました。

霜降や糟糠の妻と歩み出し

ちようど霜の降りるころで、「霜降」を辞書で引いたところ、「糟糠の妻」の文字が出てきました。苦労を一緒に重ねて来た妻は、ゆめゆめ疎かにするべからずとありました。

二〇一〇年、合唱に、フォー

十一冊の歌

児童文学作家で、鹿児島県立図書館の館長を務めた椋鳩十は『大造じいさんとガン』などで知られている。

昭和三十五年、椋鳩十は鹿児島県下に「母と子の二十分間読書」を次のように呼びかけた。

「教科書以外の本を、子どもが二十分間くらい読むのを、母が傍らに座って静かに聞く。たったこれだけのことである。」

と。しかし、これがむずかしい。娘が小学生の頃、たびたび宿題で「音読」がでた。娘は台所で夕食の用意をしている私の傍らに立って、教科書や本を大きな声で読み上げた。

その中で、心に深く残っている物語がある。モンゴルの楽器馬頭琴の由来を描いた『スーホの白い馬』だ。羊飼いの少年スーホと白い馬の絆が印象的で、何度聞いても味わい深かった。そして、音読を終える頃には、家中に夕餉のよい匂いが立ち込めていた。(篠遠)

共に生きる ~支え合うということ~

クソソングに、読書にと、体調が戻るとともに動き出しました。私の同伴者として練習に参加していた妻も違うパートを歌うようになりました。そして混声合唱「諏訪合唱団」にも入りました。この九月は、いずれのグループでもさまざまな発表会に出ましたが、来る十一月十三日には、下諏訪文化センターで諏訪合唱団の定期演奏会があり、夫婦で出演します。おでかけください。



http://interknit.blog108.fc2.com/

もう一度ステージに

立って歌いたい

佐藤 有子

「もう一度ステージに立って歌いたいです」
脳梗塞を発症し、まだ立って

かけるようになりました。

二〇〇八年の夏、諏訪湖博物館のロビーコンサートで男声コーラスの「シルクハット」を知り、見学に行ったその日に入団。十月の長野県男声合唱フェスティバル(NDF)を目指して練習中でした。覚えるために妻がピアノを弾いてくれたの特訓でした。

NDFの本番。大ホールの舞台に立ったのは初めて。六つの合唱団合同の舞台は、二百人の大合唱で、心が震えるほど感動しました。その舞台への出場を待つ間、岡谷市のやまびこ男声合唱団の会長から「来年典礼堂で、一緒にどうですか」と誘われ、練習の見学へ。これもその日に入団。二〇〇九年九月末、やまびこの特別演奏会。千三百人のホールは満員。感激して歌

いることもおぼつかない頃、リハビリの先生に、「目標は何にしようか」と問われたのに対し、これがコーイチの答えでした。

「よし、そうしよう! 大丈夫、そうなるから」と言われたのが二〇〇九年の十月。思いが叶い、翌年の二月にはもうステージで歌っていました。

コーイチに引張られるようにあちこちのグループに加わり、仲間が増え、応援してくださる方々が増えていきます。どんどんと増えていく楽譜が「元気があったことの証であり、まっさらな楽譜がこれからの励みです。ひとりしていると「今日はひとり? どうしたの?」と必ず声をかけられるように、二人でいるのがあたりまえのようになっていきます。

二人でまた一緒に次のステージに立てることを目標に、共に歩んでいきたいと思えます。